

平成26年度病院医学教育研究助成成果報告書

報告年月日：平成27年4月7日

研究・研修課題名	がんのリハビリテーション研修修了のための研修補助
研究・研修組織名（所属）	リハビリテーション部 （所属：リハビリテーション部 総括責任者；馬庭 壯吉）
研究・研修責任者名（所属）	酒井 康生 （リハビリテーション部 医師）
共同研究・研修者名（所属）	佐藤 領太 （看護部 看護師） 間壁 史良、熊谷 英岳 （リハビリテーション部 言語聴覚士）

目的及び方法、成果の内容

①目的

がん患者リハビリテーション料算定基準にある、がん患者のリハビリテーションに関する適切な研修を修了し、がん患者のリハビリテーションに対応できるスタッフ数を増やし診療の質を向上させること。

②方法

厚生労働省委託事業である「がんのリハビリテーション研修」へ参加し以下の内容について学ぶ。

- (a)がんのリハビリテーションの概要
- (b)周術期リハビリテーションについて
- (c)化学療法及び放射線療法中あるいは療法後のリハビリテーションについて
- (d)がん患者の摂食・嚥下・コミュニケーションの障害に対するリハビリテーションについて
- (e)がんやがん治療に伴う合併症とリハビリテーションについて
- (f)進行癌患者に対するリハビリテーションについて

がん医療はチームアプローチが重要であり、リハビリテーションについても同様である。本研修も医師、看護師、リハビリテーション療法士の構成で参加することを義務づけられている。

③成果

医師 酒井 康生

リハビリテーション部医師代表として酒井が参加した。

周知の通り日本の死因第1位はがんであり、当院でも最も触れる機会の多い疾患の一つである。がんは時間経過の中で、多彩な病態変化、治療法の変化が生じるため、リハビリテーションの関わりも症例毎に多種多様である。今回の研修では、これらがんの特性をふまえ、病期や治療、病態に応じ

たリハゴールの設定、リハ処方の仕方などを集学的・体系的に整理することができた。

実務的な部分では、今回の研修参加でリハビリテーション部内の3名の医師全員が、がんリハを処方できるようになった。これによりリハ処方に停滞が生じるなどの問題が解消され、速やかなリハ開始が可能になることが期待される。

また、がん医療には多くの職種が関わるため、各職種との横の連携が重要であることを改めて実感した。連携を深めるには各職種がお互いの仕事内容を理解しておくことが必要であるが、“がん医療におけるリハビリテーションの役割”への理解はまだ不十分なように思われる。今後はリハ知識の普及や、リハを適切に活用したがん医療のマネジメントが院内に構築できるよう努力していきたい。

看護師 佐藤 領太

看護師は7階B病棟所属の佐藤が参加した。がん患者のリハビリテーションについて放射線、化学療法中の患者にも適応があり予防的な関わりをおこなうことでQOLの低下を防げることを学んだ。周術期のリハビリテーションについても改めて重要性を学ぶことができた。患者との関わる時間が長い看護職者は患者のニーズを捉え、リハビリの適応についてアセスメントを行い、職種間連携をしていく必要があることを学んだ。

がんのリハビリテーションの意義や概要を把握することで、がんの看護に対する視点を広げることができた。患者との日々の関わりの中でニーズの把握、必要な情報収集に生かすことができ、他職種と連携しながらがん患者に必要なリハビリテーションが提供でき、QOLの向上につなげていくことができる。また、看護師の中でも伝達講習を行うなど幅広く伝達していくことが重要と考える。現在の所属病棟においては、周術期のリハビリについて学習したことを術前指導や退院時指導に活かすなど、専門性の向上にもつなげていきたい。

言語聴覚士 間壁 史良
熊谷 英岳

リハビリテーション療法士はリハビリテーション部言語聴覚士の間壁、熊谷が参加した。言語聴覚士が構音障害、嚥下障害の領域で関わることの多い頭頸部がん、食道がんのケースが示す症状および対応方法について幅広い知識を得ることができた。また、グループワークを通じて当院でがんのリハビリテーションを行っていく上での課題と対策を医師、看護師といった他職種と話し合えたこと、及び他施設の取り組みを知ることができたことは今後の当院での取り組みに活かせる貴重な機会であった。

今回の研修を受講したことにより、これまで言語聴覚士は算定できなかった「がん患者リハビリテーション料」を算定できることになった。診療報酬の観点からはより高い点数が得られること、また患者への関わり方の観点からは1回のリハビリテーションの時間を柔軟に設定できること、1日数回に分けてリハビリテーションができるなどの点がこれまでとの違いとなる。また、今回の研修内容はがんのリハビリテーションについて幅広い知識が得られ、臨床の質的向上において有意義であった。

今回の研修を受講したことにより、がん患者に対しより柔軟に言語聴覚療法を提供できるようになった。研修で得た知識を活かし、がん患者の機能改善、在宅復帰に対する確かな支援を行い、がん患者のQOL向上を実現していきたい。